

第4章 学習カリキュラムの効果と事例

本章では、学習カリキュラム実施の効果と受講者の事例を紹介します。

1 効果の測定方法

第2章でとり上げた先行研究における効果測定の方法は表1のとおりです。測定方法は、客観的指標である各種の神経心理学的検査と主観的指標である質問紙・アンケート等に分けられます。

表1 先行研究における効果測定方法

先行研究	測定方法	
	神経心理学的検査	質問紙・アンケート等
中島ら (2001) 1)	<ul style="list-style-type: none"> ・東大脳研式記銘力検査（有関係対語） ・Trail-Making-Test（Part A） 	<ul style="list-style-type: none"> ・手帳使用に対する動機づけ ・グループ訓練前後のチェック表 ・手帳活用検査
高塚・山崎 (2003) 2)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本版リバーミード行動記憶検査（前・後） 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活健忘チェックリスト（本人・家族）（前・後） ・記述式アンケート（グループ訓練の感想とその理由） ・実生活で使用している外的補助手段の調査
川上・中島 (2007) 3)	<ul style="list-style-type: none"> ・WAIS-R（前・後） ・WMS-R（前・後） ・Trail-Making-Test（前・中・後） 	<ul style="list-style-type: none"> ・訓練前後の自己評価（病識・記憶力） ・訓練前後の代償手段の使用状況アンケート ・グループ訓練アンケート ・グループ訓練参加についての本人と家族の感想 ・家族へのアンケート（本人と家族の意識及び日常生活の変化）
Withiel ら(2019) 4)	<ul style="list-style-type: none"> ・レイ聴覚言語学習課題（RAVLT） ・簡易視空間記憶テスト改訂版（BVMT-R） ・ロイヤルプリンスアルフレッド展望記憶テスト（RPA ProMem） ・WMS-IV（Symbol Span） ・WAIS-IV（数唱問題の逆唱） 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活健忘に関するGAS（Goal Attainment Scaling：目標達成尺度） ・日常記憶アンケート改訂版（EMQ-R） ・展望記憶包括アセスメント（CAPM）Part A ・日常生活の中で使用するストラテジーに関するアンケート

本試行においては、これらをふまえて、客観的指標と主観的指標からなる以下の内容で効果を測定しました。

(1) 日本版リバーミード行動記憶検査

日本版リバーミード行動記憶検査（以下、「R B M T」という。）は、日常記憶（everyday memory）の障害を多角的に評価する検査として医療機関などで広く活用されています。「人の名前を覚える」「短い物語を聞いて覚える」「タイマーが鳴ったら決められた質問をする」などの日常生活場面に沿った内容で構成され、即時記憶、遅延再生、展望記憶など、記憶の様々な側面を確認することができます。

結果は標準プロフィール点とスクリーニング点の2つの得点で示され、いずれも得点が低いほど障害が重度と評価されます。標準プロフィール点は重症度の指標とされ、検査項目毎に詳細に結果を評価するために使われます。また、スクリーニング点は記憶障害の有無の指標とされ、いずれの得点においても記憶障害を疑ってよいかどうかの判定の目安となるカットオフ値が年齢群ごとに決められています。

本試行では、本カリキュラムが扱う日常記憶を評価する評価法であること、検査時間がおよそ30分程度で対象者の負担が少ないこと、同質の検査が4種類用意され繰り返し実施できることから、この検査を学習カリキュラム実施の前後で行い、結果を比較することにより、日常記憶に関わる記憶機能の変化を客観的に確かめることにしました。

(2) 生活健忘チェックリスト

生活健忘チェックリストは、R B M Tに含まれている質問紙で、日常生活上の記憶障害に関する自己認識の程度を評価するものです。記憶障害のために日常生活で起こりうる13の問題や場面（例えば「つい、その辺りに物を置き、置いた場所を忘れてしまったり、物を失くしたりすることがある」など）が最近1か月のなかでどの程度あったかを、「全くない」から「常にある」の4つの選択肢から受講者自身が選んで回答します。得点は13～52点の範囲で、得点が高いほど記憶障害の自覚が強いことを意味しています。

生活健忘チェックリストは、障害のある人が自分自身のことについて回答するだけでなく、その人のことをよく知る他者（家族など）にも回答を求め、結果を比較することで、自己評価との差を検討することができます。また、定期的にチェックすることで、記憶障害の自己認識の程度がどのように変化したかを評価することができます。

今回の実践においては、生活健忘チェックリストを学習カリキュラムの前後で実施し、記憶障害の自己認識の程度がどのように変化したかを評価することにしました。

(3) Patient Competency Rating Scale

Patient Competency Rating Scale（以下、「P C R S」という。）は、脳外傷患者の自己認識を評価（その人自身が現在の長所や短所を評価）することを目的に、米国ニューヨークのPresbyterian病院のGeorge Prigatano博士らによって開発された質問紙です。

P C R Sは、「自己認識の程度を評価する」という点は生活健忘チェックリストと同じですが、認知機能に加え、日常の生活活動、感情機能、身体的な機能に対する評価が含まれており、日常生活全般における障害の自己認識の程度を評価していると言えます。具体的には、「自分の食事を用意する」「身だしなみを整える」といった身辺自立に関する項目や、「昨夜の夕食に何を食べたかを思い出す」「毎日の自分の予定を思い出す」といった記憶に関連する項目などがあり、日常生活に必要な諸能力に関する30項目について、「できない」

から「簡単にできる」の5つの選択肢から選んで回答します。得点は30～150点の範囲で、得点が高いほど障害を軽く捉えていることを意味しています。

PCRSは、その人のことをよく知る他者（家族など）にも回答を求め、結果を比較することで、自己評価との差を検討することができます。また、受障からの時間経過に伴った自己認識の変化を量的に測り、自己認識を改善する支援の方向性を評価することにも有効であるとされています。^{5) 6)}

今回の実践においては、PCRSを学習カリキュラムの前後で実施し、日常生活全般における自己認識がどのように変化したかを評価することにしました。

(4) 記憶の補完手段の利用状況等についてのアンケート

学習カリキュラムの実施前後に、記憶障害に対する自己認識を確認するアンケート（図1）と記憶の補完手段の利用状況を把握するアンケート（図2）を実施しました。なお、アンケートの作成にあたっては、オーストラリアの学習カリキュラム「Making the Most of Your Memory」⁷⁾で実施されていた受講者アンケートの内容を参考にしました。

記憶障害に対する自己認識を確認するアンケートでは、自身の記憶機能に対する自己評価や記憶の特徴に対する理解が向上したかどうかの自己評価などを確認しています。また、学習カリキュラム全体の感想や要望を自由記述で記入してもらいます。

記憶の補完手段の利用状況を確認するアンケートでは、補完手段の使用頻度と、使いやすさと使用した効果に対する認識を確認しています。

そのほか、学習カリキュラムの理解度や紹介した補完手段に対する関心の程度などを確認する感想シートの記入をセッションごとに依頼しています。なお、使用したアンケートや感想シートは巻末の資料集に収録しています。

(5) プログラム中の行動観察

学習カリキュラムを含むプログラム全体を通じて、支援者がチェックリストによる行動観察を行い、記憶障害による問題の有無や補完手段の活用状況を確認しました。このチェックリストは巻末の資料集に収録しています。また、プログラムを通じて観察される記憶障害に関わるエピソードを支援記録に記録しました。

また、補完手段の活用状況については、学習カリキュラムにおける宿題の実施状況によっても確認しました。

グループワークアンケート（実施前） 氏名： _____

1. 私の記憶力は、

1	2	3	4	5
とても悪い		普通		とても良い

	全く 思わない	あまり 思わない	どちらで もない	やや そう思う	そう思う
2. 自分の記憶の特徴を理解している					
3. どんな時に自分の記憶が良く／悪くなるか分かっている					
4. 自分の記憶力を信頼している					
5. 自分がどんな時に物忘れをしやすいか分かっている					
6. 自分の記憶をさらに良くしていけると思っている					
7. 自分の記憶は良くなっていると思う					

8. 記憶や記憶の補完手段に関して、グループワークを通して身につけたいと思っていることについて教えてください。（自由記述）

グループワークアンケート（実施後） 氏名： _____

1. 私の記憶力は、

1	2	3	4	5
とても悪い		普通		とても良い

	全く 思わない	あまり 思わない	どちらで もない	やや そう思う	そう思う
2. 自分の記憶の特徴を理解している					
3. どんな時に自分の記憶が良く／悪くなるか分かっている					
4. 自分の記憶力を信頼している					
5. 自分がどんな時に物忘れをしやすいか分かっている					
6. 自分の記憶をさらに良くしていけると思っている					
7. 自分の記憶は良くなっていると思う					
8. このプログラムは記憶の向上に役立っている					
9. 全体的に、私はこのプログラムに満足している					

10. グループワークの感想について教えてください。（自由記述）

図 1 記憶障害に対する自己認識を確認するアンケート

グループワークアンケート（実施前・実施後） 氏名： _____

1. 何か記憶を補助するための方法を使っていますか？

はい ・ いいえ

2. 記憶のための工夫（記憶術など）を何かしていますか？

解説を読み、使っている場合は頻度と使いやすさ、効果を記入してください。

名前	使用頻度			使いやすさ			効果 (○△×)
	毎日	週1回	たまに	簡単	普通	難しい	
繰り返し							
チャンキング							
記憶の痕跡をたどる							
再認							
関連付け							
精緻化							

<解説>

名前	内容
繰り返し	聞いたことを口に出したり頭の中で繰り返して覚えやすくする方法。
チャンキング	たくさんものを覚えるときに、似たものどうしでグループ分けをして覚えやすくする方法。
記憶の痕跡をたどる	何かを思い出すときに、そのとき起こったことや状況をふりかえっていく方法。（例：「家に帰ってきた時はスマホが見つからなかった。帰りに寄ったコンビニで買った覚えがあるから。その途中で落としたかも……」など）
再認	何かを思い出すときに、経験したかどうかイエスかノーで答えられる形にして思い出す方法。（例：「昨日何を食べたか」を直接思い出すのではなく、「昨日カレーを食べたか」「魚を食べたか」と考えながら昨日食べたものを思い出す、など）
関連付け	新しいことを覚えるときに、何かと関係づけることで覚えやすくする方法。（例：初対面の人を覚える際、「有名人の〇〇さんと同じ名前だ」と関連付けて覚える、など）
精緻化	新しいことを覚えるときに、情報を深く、細かく知ることで覚えやすくする方法。（例：初対面の人を覚える際に趣味を聞く、など）

その他、何かご自身で使っている方法があったら教えてください。

3. 記憶を補助するための道具を何か使っていますか？

使っている場合は頻度と使いやすさ、効果を記入してください。

(1) 紙媒体など、電子機器以外のもの

名前	使用頻度			使いやすさ			効果 (○△×)
	毎日	週1回	たまに	簡単	普通	難しい	
メモ							
スケジュール帳							
チェックリスト							
ふせん							
メモリーノート							
物理的リマインダ							
時計・アラーム							

(2) スマートフォン等の電子機器

名前	使用頻度			使いやすさ			効果 (○△×)
	毎日	週1回	たまに	簡単	普通	難しい	
メモ							
カレンダー							
リマインダ							
アラーム							
カメラ（写真）							
カメラ（動画）							
マップ							
音声入力							
ボイスメモ							

その他、何かご自身で使っているものがあったら教えてください。

図 2 記憶の補完手段の利用状況を把握するアンケート

2 結果

本試行は、令和2年6月～10月の間、合計6名の受講者に対して実施しました。受講者の概要は表2のとおりです。Aさん～Eさんの5名は小集団形式、Fさんは個別形式による実施です。

なお、Dさん、Eさん、Fさんは、高次脳機能障害の主な症状は注意障害であり、主治医の意見書に記憶障害との記載はありませんでしたが、日常記憶に関連するエピソードがあり、また、内容に関心を示し参加を希望したため、受講対象に含めました。

表2 受講者の概要

受講者	A	B	C	D	E	F
性別	男性	男性	男性	男性	男性	男性
年代	50歳代	50歳代	20歳代	40歳代	40歳代	50歳代
受障原因	脳梗塞	くも膜下出血	びまん性脳損傷	多発性脳梗塞	小脳出血	脳出血、脳梗塞
記憶障害の診断と特徴	あり ■短期記憶、記憶力低下	あり ■記銘力障害	あり ■長期記憶の障害	なし	なし	なし
その他の高次脳機能障害の状況	注意障害（配分性、注意機能、注意の切り替え） 言語（舌麻痺あり、発語不明瞭）	注意障害 左半側空間無視	注意の持続	注意障害	注意障害（切り換え、情報処理速度低下）	注意障害 遂行機能障害
日常記憶に関連するエピソード	とっさに言われた事柄を忘れる。 手帳に書いたスケジュールを見つげられない。	提出書類の持参を2日続けて忘れる。	金曜日にごまかまで作業をしたか、月曜日に忘れていている。	同じ話を何度もすることがある。	頼まれた事をし忘れる。 マイボトルを置き忘れる。	書類を何度も催促されて10日遅れで提出する。

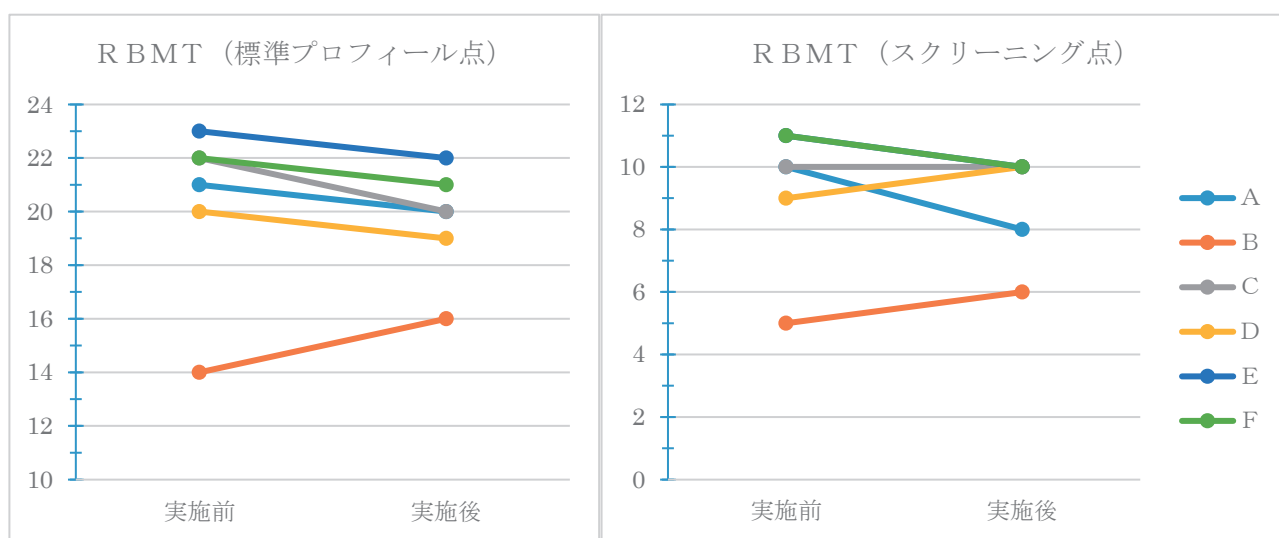
(1) RBMT

学習カリキュラムの実施前後に行った、受講者6名のRBMTの結果は図3のとおりです。受講者6名のうち5名（Aさん、Cさん、Dさん、Eさん、Fさん）は実施前、実施後ともに得点がカットオフ値以上を示し、RBMTの結果からは記憶障害はないと判断されました。残りの1名（Bさん）は実施前、実施後ともにカットオフ値を下回り、記憶障害があると判断されました。

実施前後の得点を比較すると、標準プロフィール点では6名中5名に得点の低下が見られ、1名（Bさん）に得点の向上が見られました。また、スクリーニング点では6名中3名（Aさん、Eさん、Fさん）に得点の低下が、2名（Bさん、Dさん）に得点の向上が

見られ、1名（Cさん）は横ばいでした。ただ、いずれも1～2点の範囲の変化と顕著な違いはなく、客観的指標において日常記憶に関わる記憶機能の改善は確認できませんでした。ただ、検査結果を個別に詳細にみると、例えばRBMTにおける姓名の記憶問題の回答が実施前後に改善し、学習カリキュラムで扱った名前の記憶については学習効果が見られたというエピソードがありました。

なお、オーストラリアにおける学習カリキュラムの効果を検証した報告⁴⁾では、神経心理学的検査による効果測定において、展望記憶の改善は有意に見られたものの、視覚的・言語的な新規学習と記憶の機能については、学習カリキュラム実施前後および比較群（学習カリキュラム実施群、コンピューターによる認知トレーニング群、何も実施していないコントロール群）間の明らかな違いは見られなかったとし、効果測定の方法の検証も含めさらなる再現テストが必要としています。



注：EさんとFさんのスクリーニング点が実施前・実施後とも同点だったため、重なって表示されている

図3 RBMTの結果

(2) 生活健忘チェックリスト

学習カリキュラムの実施前後に行った、受講者6名の生活健忘チェックリストの結果は図4のとおりです。

実施前後の得点を比較すると、得点が下がった者（つまり、記憶障害に対する自覚が少なくなった者）が6名中4名（Aさん、Bさん、Cさん、Dさん）、得点が上がった者（つまり、記憶障害に対する自覚が強まった者）が2名（Eさん、Fさん）でした。

個別相談においてチェックリストの各項目の選択理由を詳細に確認したところ、得点が下がった理由として、メモを取ることで頼まれた買い物を簡単に思い出せるようになったなど、補完手段の活用により記憶障害によるエラーが減ったからとする事例がみられました。逆に、得点が上がった理由として、プログラム内で日常記憶のエラーがあることに改めて気づいたからとする事例がみられました。これらの変化は、学習カリキュラムを受講したことによる影響だけでなく、プログラム受講前の在宅生活では気づかれなかった課題が顕在化したことなど、他の影響も考えられます。

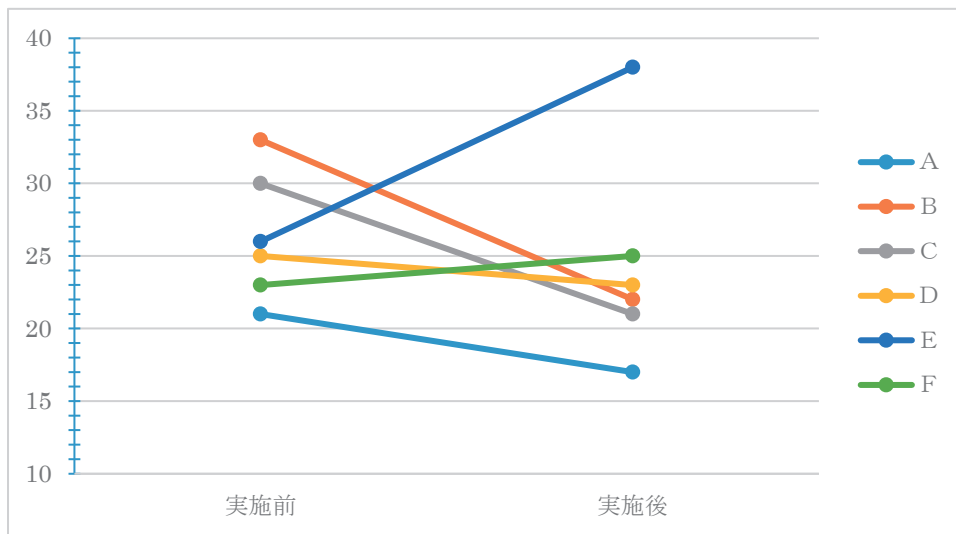


図4 生活健忘チェックリストの結果

(3) PCRS

学習カリキュラムの実施前後に行った受講者6名のPCRSの結果は図5のとおりです。

実施前後の得点を比較すると、得点が下がった者（つまり、日常生活上の障害に対する自己認識が強くなった者）が6名中2名（Eさん、Fさん）、得点が上がった者（つまり、日常生活上の障害に対する自己認識が軽くなった者）が4名（Aさん、Bさん、Cさん、Dさん）でした。

個別相談においてチェックリストの各項目の選択理由を詳細に確認したところ、得点が下がった受講者については自身の障害に対する気づきが深まったことがうかがえ、得点が上がった受講者については補完手段の獲得などにより障害を自覚する機会が減少したことがうかがえました。しかし、これらの変化には、学習プログラム以外の様々な取組みが影響する可能性もあることから、PCRSの結果だけで効果を判断することは難しいと考えられます。

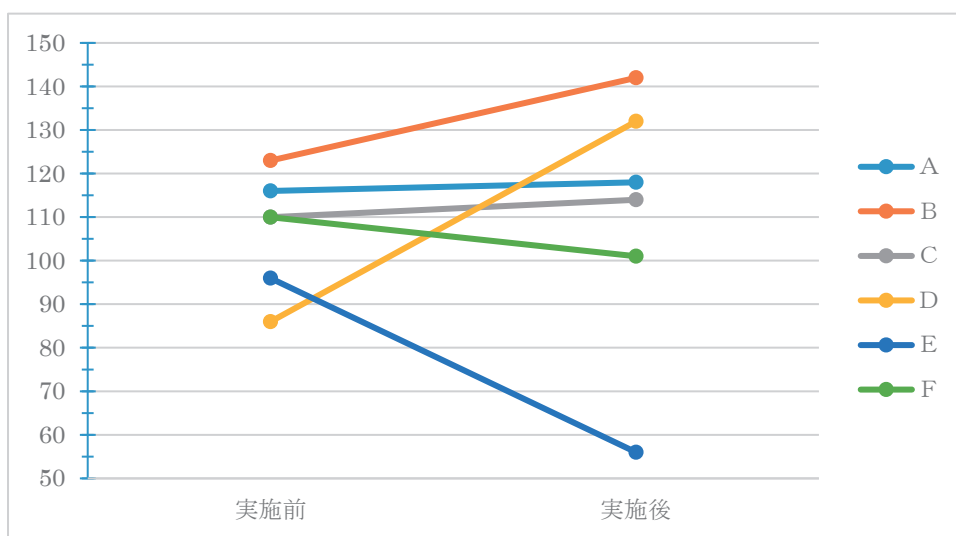


図5 PCRSの結果

(4) 記憶の補完手段の利用状況等についてのアンケート

ア 自身の記憶についての理解

記憶障害に対する自己認識を確認するアンケートでは、自身の記憶機能に対する自己評価や学習カリキュラム全体の感想を確認しています。受講者6名の回答結果を表3に、学習カリキュラム全体の感想（自由記述）を表4にまとめました。

表3によると、記憶や記憶力の自己評価（質問1、質問4、質問6、質問7）が向上した受講者は4名、記憶の特徴の理解（質問2、質問3、質問5）が向上した受講者は3名でした。受講者6名全員が1つ以上の質問項目で自己評価や理解度の向上を示しましたが、評価を下げた項目のある受講者も2名（Aさん、Fさん）いました。評価を下げたことについて個別相談の中で確認したところ、「気を抜いたときや強調して伝えられなかったときに記憶が悪くなる」「物を落としても、そのときのことを覚えていないことがある」と話し、記憶機能に対する認識が高まった面もあることがうかがえました。

表4の自由記述を見ると、「スマホを記憶の道具として使用していこうと思った（Aさん）」「記憶の保持にはいろいろな技があることが分かりました。ゆっくりと色々試してみたいと思いました（Bさん）」「睡眠やストレスをうまくとっていかなくてはと思いました（Cさん）」「全体を通して自分に合った方法でリマインダーを活用したいです。名前を覚えるのが苦手なので、関連付けで覚えるようにしたいです（Dさん）」「記憶の種類や方法の分類が学べてよかったです。グループワークの初期の記憶が弱くなっているのを感じます（Eさん）」「物を落としてしまうことがあったが、対処が分かった（Fさん）」とあり、学習カリキュラムの多くの情報の中から、受講者それぞれが自分に合った効用を感じている様子がうかがえます。

なお、終了後のアンケートにおいて学習カリキュラムに対する満足度を確認しました。「このプログラムは記憶の向上に役立っている」「全体的に私はこのプログラムに満足している」という2つの質問項目に対し、すべての受講者が「そう思う」「ややそう思う」を選択し、受講者の満足度は高いことがわかりました。

表3 自身の記憶についての理解（実施前後）

受講者	1. 私の記憶力は、		2. 自分の記憶の特徴を理解している		3. どんな時に自分の記憶が良く／悪くなるか分かっている		4. 自分の記憶力を信頼している		5. 自分がどんな時に物忘れしやすいか分かっている		6. 自分の記憶をさらに良くしていけると思っている		7. 自分の記憶は良くなっていると思う	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
A	3	3	4	3	4	3	4	4	4	4	3	5	3	3
B	2	4	4	4	4	4	2	4	4	5	4	5	2	2
C	1	2	3	4	4	4	3	2	4	5	2	2	2	2
D	2	2	5	5	2	5	1	2	2	5	5	4	3	4
E	2	2	1	4	1	1	1	1	1	1	5	5	2	2
F	3	4	4	4	2	4	1	3	4	3	5	3	3	3

回答方法（いずれも5つから選ぶ）

問1. 1 = とても悪い、2 = 悪い、3 = 普通、4 = 良い、5 = とても良い

問2～7. 1 = 全く思わない、2 = あまり思わない、3 = どちらでもない、4 = ややそう思う、5 = そう思う

※1～3が4～5に変化した項目を塗りつぶしている。

表4 学習カリキュラム全体の感想（自由記述）

記憶に関する知識	記憶の種類や方法の分類が学べてよかったです、グループワークの初期の記憶が弱まっているのを感じます。つまり、保持（長期記憶）が悪くなっていると感じます。（Eさん）
	記憶がよくないときがあることがわかった。（Fさん）
記憶の補完手段	スマホを記憶の道具として使用していこうと思った。（Aさん）
	記憶の保持にはいろいろな技があることが分かりました。ゆっくりといろいろ試してみたいと思いました。（Bさん）
	全体を通して自分に合った方法でリマインダーを活用したいです。名前を覚えるのが苦手なので、関連付けて覚えるようにしたいです。（Dさん）
記憶に良い生活習慣	物を落としてしまうことがあったが、対処がわかった。（Fさん）
	睡眠、食事、運動全てのことが記憶に関係していることが分かったので、さらに生活の中に活かしていこうと思った。（Aさん）
	睡眠やストレスをうまくとっていかなくてはと思いました。（Cさん）

イ 補完手段の利用状況

記憶の補完手段の利用状況を把握するアンケートでは、補完手段の使用頻度と、使いやすさと使用した効果に対する認識を確認しています。

受講者6名のアンケート結果について、【使用頻度】「毎日」を3点、「週1回」を2点、「たまに」を1点、「使用なし」を0点、【使いやすさ】「簡単」を2点、「普通」を1点、「難しい」と「使用なし」を0点、【効果】「○（あった）」を2点、「△（どちらともいえない）」を1点、「×（なかった）」と「使用なし」を0点と置き換えて、1項目あたりの平均を算出した結果は表5のとおりです。

使用頻度、使いやすさ、効果ともに実施後に向上し、使用頻度が最も向上したのは内的ストラテジー、使いやすさと効果が最も向上したのは外的補助具（電子機器以外）でした。特に大きく変化したのは「物理的リマインダ」で、実施前は1名が「週1回」使っているだけでしたが、実施後は3名が「毎日」、2名が「週1回」使うようになったと回答し、それに伴って、使いやすさ、効果ともに向上しています。

アンケート結果からは、学習カリキュラムを受講することにより、補完手段を活用する頻度が増え、容易に使えるようになり、効果も感じているという傾向がうかがえます。

表5 補完手段の利用状況（実施前後）

	実施前			実施後		
	頻度	使いやすさ	効果	頻度	使いやすさ	効果
内的ストラテジー	1.11	0.81	0.92	1.61	1.00	1.25
外的補助具（電子機器以外）	1.22	0.67	0.35	1.45	1.16	1.37
外的補助具（電子機器）	0.80	0.58	0.73	1.01	0.85	0.89

集計方法

【使用頻度】 毎日：3点、週1回：2点、たまに：1点、使用なし：0点

【使いやすさ】 簡単：2点、普通：1点、難しい：0点、使用なし：0点

【効果】 ○：2点、△：1点、×：0点、使用なし：0点

回答を上記の数値に置き換え、1項目あたりの平均を算出した。

※頻度、使いやすさ、効果それぞれで最も変化が大きかった項目を太字ゴシック体で表記した。

(5) プログラム中の行動観察

プログラム全体を通じて行った行動観察では、例えば、身体的な後遺症のために書字に負担感があり、外的補助具（電子機器以外）の使用に難しさを感じていた受講者が、それまで使えていなかったスマートフォンのメモ、リマインダー等のアプリを使ってスケジュール管理を行うようになるといったエピソードが見られました。行動観察の実際については、次項の事例紹介において示します。

宿題の実施状況を見ると、第1回の宿題については、6名のうち5名が2つの宿題のうち1つを忘れていましたが、第2回以降は、カリキュラムで紹介した補完手段を活用するなどにより、全員が宿題を忘れずに実施できるようになりました。宿題を忘れずにを行うために活用した補完手段は、手帳やふせんへのメモ、スマートフォンのメモアプリやカレンダーアプリの活用といったものが多かったですが、ふせんに書いてスマートフォンやプログラム時に座る自席の机に貼り付ける（物理的リマインダ）、配付資料の「宿題」をまとめ

たページをスマートフォンのカメラで撮影してお気に入りに登録する、といったように、学んだことをもとに自分で工夫を凝らして対処する受講者もいました。

3 事例紹介

(1) 事例1（電子機器を外的補助具として活用するようになった事例）

ア 対象者の概要

Aさんは50歳代の男性です。在職中に脳梗塞により高次脳機能障害を受障し、一度は職場復帰したものの脳梗塞が再発し、休職期間が満了したため退職しました。その後、地域センターでの相談を経て就職プログラムを受講しました。学習カリキュラムに参加したのは、1回目の脳梗塞の発症から1年11か月後でした。

プログラム開始にあたり医療機関から提供された情報によると、身体障害として両側麻痺による移動能力の低下、両上肢の巧緻性低下、発語不明瞭が（身体障害者手帳4級）、高次脳機能障害として短期記憶障害と注意力低下がみられ、就労にあたっては、代償手段の獲得と作業内容・就業時間の配慮が必要とされていました。基本的な日常生活とスケジュールは自己管理可能で、就労への意欲は高く、病識については改善傾向と記載されていました。

イ 学習カリキュラム受講前の状況

Aさんは、就職に向けた自身の課題について「体力、運動機能の低下と注意障害、話しくさ」と話され、医療機関で指摘されている「短期記憶障害」は意識していない様子でした。また、生活健忘チェックリストの結果は21点で、記憶障害の自覚はあまりありませんでした。しかし、生活健忘チェックリストの回答状況を詳細に確認すると（表6）、「机にしまった書類の処理を忘れ溜め込んでしまった」「相談時に約束した事柄（他機関に相談の予約を入れるなど）をし忘れる」といった、記憶障害に関連するエピソードは時々あるようでした。

また、プログラム受講中の様子でも、とっさに言われた事柄を忘れる、手帳に書いたスケジュールをなかなか見つけられないといったエピソードが観察されました。

学習カリキュラムの実施前に行ったRBMTでは、スクリーニング点は10点と年齢群のカットオフ値を上回り、客観的な指標のうえでは記憶障害はないとの結果でしたが、標準プロフィール点は21点とボーダーラインでした。

なお、プログラムでは、注意障害からくる見落としや記入漏れなどの作業ミスと、易疲労による集中力や作業耐性の課題が大きかったため、まずは作業課題プログラムを通じてそれらの課題に重点的に取り組むこととなりました。

表6 生活健忘チェックリストの回答状況（Aさん）

全くない	時々ある
<ul style="list-style-type: none"> ● 昨日あるいは数日前に言われたことを忘れており、再度言われなと思い出せないことがある。 ● 前日の出来事の中で、重要と思われることの内容を忘れていくことがある。 ● 一度、話した話や冗談をまた言うことがある。 ● 直前に言ったことを繰り返し話したり、「今、何を話していましたっけ」などと言うことがある。 ● 以前、行ったことのある場所への行き方を忘れていたり、よく知っている建物の中で迷うことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ● つい、その辺りに物を置き、置いた場所を忘れてしまったり、物を失くしたりすることがある。 ● 物がいつもしまっている場所を忘れて、全く関係のない場所を探したりすることがある。 ● ある出来事が起こったのがいつだったかを忘れていくことがある。 ● 必要な物を持たずに出かけたり、どこかに置き忘れて帰ってきたりすることがある。 ● 自分で「する」と言ったことを、し忘れることがある。 ● 以前に会ったことのある人たちの名前を忘れていくことがある。 ● 誰かが言ったことの細部を忘れていたり、混乱して理解していることがある。 ● 何かしている最中に注意をそらす出来事があった後、自分が何をしていたか忘れることがある。

ウ 学習カリキュラムの受講状況

Aさんは休むことなく、6セッション全てに参加しました。

実施前のアンケートでは、自分の記憶力を「普通」と評価し、このカリキュラムで身につけたいこととして「道に迷うことが多いのでうまく覚えられたら助かります」と記入しました。補完手段の利用状況等についてのアンケートでは、内的ストラテジー（記憶の技）の使用頻度は低く、外的補助具（記憶の道具）はメモが中心で、スマートフォンなどの電子機器についてはアラームやカメラ、マップアプリをたまに使用する程度とのことでした。

< 第1回 >

はじめに行う自己紹介において、記憶で改善したいこととして「メモをして忘れないようにすることを大事にしたいなと思います」と話し、記憶の主たる補完手段は手帳・メモであることがわかりました。一方、「書くのが苦手なので、スピードについていけない」とも話し、メモだけではうまくいかないと感じることもある様子でした。また、意見交換の中で若い受講者がスマートフォンを記憶の補完手段として活用していることを聞き、セッション終了後の感想シートには「スマートフォンをうまく使いこなしたい」と記入し、電子機器の活用に関心を示されました。

イラストを見て10個の物を覚える練習では、「チャンキング」の技を使ってうまく記憶

していましたが、「(グループ分けから)漏れると覚えきれなかった」と感想を述べ、記憶の技を使う実感は持てたようでした。また、感想シートには「記憶することが苦手なこともあるので挑戦したい」と記入し、記憶障害への理解や記憶の課題に取り組む意欲を示しました。

<第2回>

第1回の宿題のうち「10個の物を覚える」課題は、「チャンキング」の技を使い、「夏のイメージ(海、セミ、金魚、麦わら帽子)」で複数のものを効率よく覚えることができたとのことでした。「身の回りの環境を改善する」宿題については、洋服などを片付けたと報告しました。

第2回の重要な内容である「メモの使い方」について、セッション後の感想シートには、他の受講者が紹介した「大切なところは目立たせる(色や囲みをつける)」ことについて特記し、受講者同士の意見交換がより理解を深めたと思われました。また、Aさんの気づきを強化するため、その後の作業課題プログラムや個別相談において、メモを取る際に重要点を目立たせることや色ペンを持ち歩くことなどについて繰り返し助言しました。

「道順を覚える」の練習(ミニ・ウォークラリー)では、「自分は道を覚えられない」と消極的な発言がありましたが、「練習を自分なりにやってみると勉強になると思った」と感想シートに記入があり、個別相談で確認したところ、セッションで紹介した「下見をして目印を覚えておく」「地図を描く」といった対処は効果がありそうなので今後も実施したいと話しました。そこで、「前の職場までの道のりを説明する」という課題を設定し、道順を覚えるポイントを復習しました。Aさんが描いた地図は、曲がり角が矢印で示され、金融機関や商店、信号機、通りの名称といった一般的な情報だけでなく「赤い看板」といったように目印の特徴も記入されていてわかりやすい地図でしたので、ポイントを押さえていることをフィードバックしました。

<第3回>

第2回の宿題「生活に運動を取り入れる」「過去の写真を持ってくる」「スケジュール帳をもって来る」は、全て忘れず行うことができました。

第3回は、展望記憶を補完する外的補助具を取り上げました。意見交換の中で、Aさんは、スケジュール帳の例として「ポケットに入る大きさの手帳を使っている」と他の受講生に紹介しました。また、薬を飲み忘れないために自身が活用している補完手段として、「薬をテレビの下の台に置くようにしている」と物理的リマインダを挙げました。一方、外的補助具としてスマートフォンのカレンダーアプリを使っている受講者の話を聞いて、「スマートフォンをもっとうまく使いこなせるといいと思いました」と感想シートに記入しました。

第3回の宿題を、Aさんは手帳のカレンダーに記入しましたが、他の受講者がスマートフォンのカレンダーアプリやカメラアプリに入力する様子を見て、スマートフォンに対する関心が一層高まったようでした。

<第4回>

第4回の重要な内容は、スマートフォンをはじめとした電子機器を外的補助具として活用することです。スマートフォンの操作に不慣れなAさんも、支援者が個別にサポートしながら、自分のスマートフォンを使って、アラームやカメラ、カレンダーなどの機能を体験する練習を行いました。

感想シートには、「記憶の道具として電子機器を使ってみたい」、具体的には「カレンダーアプリに日付と内容等を記入する」と記入しました。

<第5回>

第4回に課した宿題「スマートフォン等の電子機器の新しい機能を使う」では、スマートフォンのカレンダーアプリを試しました。宿題の実施報告では、「その日に必要なものを全部入れられる。開いた時にすぐ出てくるから忘れない」と感想を話し、情報が一元管理できる便利さを実感した様子でした。さらに個別相談で確認したところ、「いつも手元にあって、すぐに見たり登録したりできる点が便利だと感じた」とのことです。電子機器活用の利点を体験できました。

内的ストラテジー（記憶の技）を使って人の名前を覚えるモジュールの練習では、3人のうち2人の名前は難なく覚え、残り1人は関連付け（知っている著名人と同じ名前）を用いて覚えました。感想シートでは、今後も使いたい内的ストラテジー（記憶の技）として「関連付け」を挙げました。

<第6回>

第5回の宿題のうち、「翌日に担当カウンセラーあてに電話をかけ、自分の名前と電話した時間、グループワークで一番役立ったことを伝える」という課題は、手帳のスケジュール欄に記入して実施できました。もう一つの「睡眠日誌をつける」課題は、用紙を机の引き出しに入れたまま忘れてしまい、スタッフが前日に声をかけたことで思い出しました。受講前にも「机にしまった書類の処理を忘れ溜め込んでしまったことがある」と話しており、目につかないところに片付けると処理を忘れがちになることが明らかになりました。

第6回では、クイズ形式で第1回から第5回の内容を復習しました。今後、どのような記憶の技や道具を使いたいかたずねると、「スマートフォンをもっと使いこなせたら便利だと思いました」と話し、習得のためにどうしたいかたずねると、他の人の意見に同調する形で「1日1回、無理やりでも使ってみたら覚えられるかなあ」と意欲を示しました。また、記憶に良い生活習慣を維持していくことについては「難しいですね」と苦笑いしていました。

<結果>

学習カリキュラム実施前と実施後の記憶の補完手段の利用状況等についてのアンケートの結果は、表7のとおりです。

内的ストラテジーについては、実施後に使用頻度が高まり、それに伴って難易度も「難しい」から「普通」に変化し、学習カリキュラムを受講した結果、内的ストラテジーを意識して使用するようになったことがうかがえます。

外的補助具については、実施前は電子機器以外に偏っていましたが、実施後は、電子機

器の活用が進みました。電子機器で活用している機能は限られていますが、プログラムの中でメモアプリやカレンダーアプリを毎日使用し、簡単に操作できるようになった様子が観察されました。また、電子機器以外の項目についても、難易度や効果に対する認識の向上が明確になっています。

客観的指標であるRBMT（標準プロフィール点）は、実施前21点、実施後20点とほぼ横ばいでした。また、主観的指標のうち、生活健忘チェックリストは実施前21点、実施後17点とやや改善、PCRSは実施前116点、実施後118点とほぼ横ばいで、数値的な変化はあまり見られませんでした。ただ、記憶の理解に関するアンケートでは、「自分の記憶をさらに良くしていけると思っている」という質問で、「あまり思わない」と答えていたのが「そう思う」と変化しました。スマートフォンという新たな記憶の道具を得て、記憶の課題を改善できることに期待を持ったものと考えられます。

表7 記憶の補完手段の利用状況を把握するアンケート（Aさん）

		実施前			実施後		
		頻度	難易度	効果	頻度	難易度	効果
記憶の技	繰り返し	たまに	普通	○	毎日	普通	○
	チャンキング	たまに	難しい	△	たまに	普通	△
	記憶の痕跡をたどる	週1回	普通	△	たまに	普通	△
	再認	週1回	難しい	○	週1回	普通	△
	関連付け	たまに	普通	△	たまに	普通	○
	精緻化	たまに		△	たまに	難しい	△
(電子機器以外) 記憶の道具	メモ	毎日	簡単		毎日	簡単	○
	スケジュール	週1回	普通		週1回	簡単	○
	チェックリスト	たまに	普通		たまに	簡単	○
	ふせん	週1回	簡単		たまに	簡単	○
	メモリーノート	週1回	普通		毎日	普通	○
	物理的リマインダ	週1回	普通		たまに	簡単	○
	時計アラーム	週1回	簡単		たまに	簡単	○
(電子機器) 記憶の道具	メモアプリ				毎日	簡単	○
	カレンダーアプリ				毎日	簡単	○
	リマインダーアプリ						
	アラームアプリ	週1回		○	たまに	普通	
	写真(スマートフォン)	たまに		△	たまに	普通	△
	動画(スマートフォン)	たまに		△	たまに	難しい	
	マップアプリ	たまに		△	たまに	普通	○
	音声入力				たまに	難しい	
	ボイスメモ				たまに	難しい	

エ 就職プログラム終了後の様子

Aさんは就職プログラム終了後に、ある事業所で職場実習を行うことになりました。職場実習の打合せの日程をお伝えしたところ、スマートフォンを取り出してスケジュールアプリを起動し、入力しはじめました。Aさんはタイトルや場所といった文字情報は難なく入力できましたが、開始時刻と終了時刻の入力でつまづいていました。支援者が操作方法を伝えながら時刻を設定し、スケジュールを登録したあと、追加情報として、場所をタップすると地図アプリと連動して経路や所要時間を表示できること、また、あらかじめ設定しておけば予定を知らせてくれることなど、さらに便利な機能を説明しました。

最終日に書いたプログラム全体の感想文には、「グループワークで教わった記憶に関する技を使用しながら、仕事や生活にも使用していこうと思いました」と記載し、学習カリキュラムの受講を通じて、補完手段の活用に対する意識が高まったことがうかがえました。

Aさんは3週間の職場実習を行いました。職場実習期間中、就業時間や職務範囲を段階的に設定する配慮を得て、再就職することができました。現在は、地域センターのジョブコーチ支援事業を活用しながら、就業時間や職務範囲を順次拡大することとしています。

オ 考察

Aさんは、学習カリキュラムの受講前では、記憶の補完手段として主に手帳などの紙媒体の外的補助具を活用し、電子機器はほとんど活用していませんでした。電話の着信音が鳴らないように設定するのに苦勞するほどスマートフォンの操作に不慣れであり、手帳などの活用により宿題の多くを実施できていたことから、支援者としても当初は電子機器の使用を積極的に勧める予定はあまりありませんでした。

ところが、学習カリキュラムを通じて、外的補助具としてのスマートフォンの活用を前向きにとらえ、Aさんは意欲的に取り組んでいきました。これは、意見交換で他の受講者から活用効果について話を聞いたことや、練習や宿題を通じてスマートフォンの使用を体験したことが影響したと考えられます。

しかし、Aさんが学習カリキュラムに参加したのは就職プログラムの終盤であったため、新たな外的補助具を活用しはじめたところで支援期間が終わってしまいました。補完手段の活用が定着するには個別支援をあわせて行うことが重要であり、学習カリキュラムをプログラムの早期に実施することや、プログラム後の支援を担う地域センターに支援を適切に引き継ぐことなど、個別支援への移行を含めた計画的な支援を行う必要があると考えられました。

(2) 事例2（補完手段への意識づけが高まった事例）

ア 対象者の概要

Bさんは50歳代の男性で、大学卒業後に現在の会社に就職し、経理業務を担当していました。センターを利用する1年3ヶ月前にくも膜下出血（合併症として脳梗塞、水頭症を発症）のために高次脳機能障害を受障し、休職に入りました。

復帰プログラム開始にあたり、医療機関から提供された情報によると、Bさんは身体機能には問題がなく、高次脳機能障害として、記憶障害、注意障害による同時課題遂行困難、左半側空間無視があり、これらについて、「上記について障害理解はあるが、自己修正は困難」と記載がありました。また、高次脳機能障害により精神障害者保健福祉手帳3級を取得していました。

人当たりが良く真面目な性格で、上司からは受障前の仕事ぶりを「ミスはめったになく、ほとんど完璧」と評されていました。受障前と比べて真面目、温和といった性格に変化はありませんが、記憶障害、注意障害のために物忘れやケアレスミスが多発するようになっていました。特に記憶障害の影響は大きく、日常生活場面では食べたばかりの食事メニューを思い出せない、リハビリの予定が変更になったことを忘れて日程を間違える、といった課題がありました。そのため、Bさん、事業主、支援者の三者で復職に向けた相談を行

う中で、職業センターを利用してこれらの課題についての対処方法を検討していくこととなりました。

イ 学習カリキュラム受講前の状況

Bさんは自身に記憶障害があることは理解しており、対処方法として常にメモを持ち歩いて記録する習慣を身につけていました。ただし、メモをどこに書いたか分からなくなったり、メモを見忘れていたりすることがあり、例えば職業センターに提出する書類について、メモを取っていても持参することを2日続けて忘れることがありました。

カリキュラムの開始前に行ったR B M Tの結果では、標準プロフィール点は14点、スクリーニング点は5点であり、40～59歳のカットオフ値を下回り、中等度記憶障害に相当する結果でした。

ウ 学習カリキュラムの受講状況

Bさんのカリキュラムの受講状況、個別相談の内容や記憶障害とその補完手段に関するエピソードについて概要を述べます。

<第1回>

Bさんは、カリキュラムによる到達目標について「記憶の悪くなっていることを自覚し、どうすれば忘れないようになるか、思い出せるか学びたい」と述べています。実施前アンケートでも、自身の記憶力を5段階評価で2と低く評価していました。一方で、「自分の記憶の特徴を理解している」「自分がどんな時に物忘れをしやすいか分かっている」という項目は5段階評価で4と評価し、記憶障害に対する自己認識は進んでいる様子も見られました。

内的ストラテジーを使って「10個の物を覚える」練習では、1回目は10個中5個、2回目は10個中4個と苦戦する様子が見られました。なお、他の受講者は概ね1回目で10個中7～9個、2回目は全員1回目を上回る結果となっています。練習後に結果を共有することはしませんが、Bさんは周囲の反応やその後の受講者同士の会話から、自身の記憶の苦手さを改めて自覚するとともに、外的補助具を使って記憶を補う必要性を感じたようでした。この回の感想シートの中で、「記憶には限界があるので、何か道具を活用したい」と振り返っています。

<第2回>

第1回の宿題のうち、「10個の物を覚える」課題については、「10個の物が描かれたプリントをスマホで写真に撮り、行き帰りの電車の中で見て覚えるようにした」とのことでした。結果は10個中5個と、第1回の練習とあまり変わりませんでした。宿題そのものは覚えていました。一方、「身の回りの環境を改善する課題は忘れていた」とのことでした。

第2回の主な内容であるメモについては普段からある程度使えており、練習のミニ・ウォークラリーの中でも言われた問題を確実にメモしてチェックポイントをクリアできていました。一方で、隠れチェックポイント「作業室Aの床はどの色だった？」といった、事前の指示事項がなくメモが取れない、注意機能を必要とするような記憶課題への対応は苦

手としていました。ただし、この時にペアになった方がコースの中の場면을写真で記録していたことでこの問題に答えることができ、外的補助具として写真を使う有効性を実感されました。

第2回の感想シートには、「携帯のカメラを使っていきたい」「なかなか覚えているということが難しいので、写真を撮ることを覚えていきたい」と記入されていました。

<第3回>

第2回の宿題であった「生活に運動を取り入れる」「過去の写真を持ってくる」「スケジュール帳をもってくる」は全て行うことができている、今回は宿題を忘れることはありませんでした。

第3回では、時差再生課題を行った際、出された問題を配付資料にメモしましたが、後からどこにメモを取ったのか分からなくなってしまい、上手く参照できなかったことがありました。この時は提示された写真を見て「確かこのような問題だった」と思い出すことができ、問題に正解することができました。ただし、この課題を通してメモをどこに取るか決めておかないと分からなくなってしまうことを認識し、この回の感想シートには「いろいろな道具を使うとどこに書いたかわからなくなってしまうので、これに記入すると1つに決めておくこと。ただ、手で書くということは続けておきたい」と記入されています。

<第4回>

第3回の宿題のうち、「脳に良い食品を食べる」「月曜日に担当のカウンセラーに電話をかける」はどちらもできていました。なお、宿題を覚えておくための補完手段は「自分のスマートフォンにふせんを貼っておく」という物理的リマインダを活用する方法でした。

第4回はスマートフォンのアプリの紹介が中心であり、Bさんとしてはある程度は使っているものの若い方のように使いこなしているという感覚がなく、戸惑いもあるようでした。この回の感想にも、「スマホ利用は有効と思っているが、どのように使うべきか、今一つしっくりきていないので、使うことに抵抗感がある」と記載されていました。これまでの仕事の中でも手書きのメモやスケジュール帳に慣れていたこともあり、個別相談の中では自分の使いやすい道具を使って予定管理ができればよいことを伝えましたが、Bさん自身がスマートフォンの有効性に関心があったことから、スマートフォンのカレンダーアプリを使った予定管理を試してみることとなりました。

<第5回>

第4回の宿題「次回のグループワークまでに何か新しいアプリを試してみる」については、先述のとおりスマートフォンのカレンダーアプリを試してみました。予定を漏れなくアプリに記入することができており、またスケジュールごとに色分けなどもなされているなどの工夫もあり、本人としても使いやすいと感じられたようです。

第5回の人の名前を覚える練習では、Bさんは第1回での物の名前を覚える練習で苦戦していたこともあり、覚える人数を3人に減らし、覚えるのは下の名前のみ、と難易度を下げて実施しました。結果として3人全員の名前を覚えることができており、感想シートでは今後使っていきたい内的ストラテジーとして「関連付け」を挙げていました。

<第6回>

第5回の宿題について、「睡眠日誌をつける」という課題については忘れていました。もう一つの「翌日に担当カウンセラーあてに電話をかけ、自分の名前と電話した時間、グループワークで一番役立ったことを伝える」という課題については、前回の電話の課題と同様に「自分のスマートフォンにふせんを貼っておく」という外的補助具の活用で正確に行うことができていました。睡眠日誌の課題についてはふせんやメモ等を書くことを忘れてしまったということで、外的補助具を使って記憶を代償しないと忘れてしまうことを再認識することとなりました。

<カリキュラム結果>

実施前と実施後の記憶の補完手段の利用状況等についてのアンケートの結果は、表8のとおりです。

表8 記憶の補完手段の利用状況を把握するアンケート（Bさん）

		実施前			実施後		
		頻度	難易度	効果	頻度	難易度	効果
記憶の技	繰り返し	毎日	簡単	○	たまに	普通	○
	チャンキング	たまに	普通	△	たまに	普通	
	記憶の痕跡をたどる	たまに	普通	△	たまに	普通	
	再認	毎日	簡単	○	たまに	普通	
	関連付け	たまに	普通	○	たまに	普通	
	精緻化	たまに	難しい	△	たまに	普通	
(電子機器以外) 記憶の道具	メモ	毎日	普通		週1回	簡単	○
	スケジュール	毎日	普通		毎日	簡単	○
	チェックリスト	毎日	普通		たまに	簡単	○
	ふせん	たまに	簡単		たまに	簡単	○
	メモリーノート	毎日			毎日	簡単	○
	物理的リマインダ				たまに	普通	△
	時計アラーム	毎日	簡単		たまに	普通	△
(電子機器) 記憶の道具	メモアプリ	たまに	普通	○	週1回	簡単	○
	カレンダーアプリ	週1回	普通	○	毎日	簡単	○
	リマインダーアプリ	たまに	普通	○	たまに	簡単	△
	アラームアプリ	たまに	普通	○	たまに	普通	△
	写真(スマートフォン)	たまに	簡単	○	たまに	普通	○
	動画(スマートフォン)			△			×
	マップアプリ			△	たまに		△
	音声入力			△			△
	ボイスメモ			×			×

実施前と実施後を比較すると、実施前には全体的に簡単で効果があると思っていた内的ストラテジーが、実施後は使用頻度が低下し、また効果もあまり感じられないという認識に変化しています。逆に、実施前はあまり効果を感じていなかった外的補助具については、簡単に使うことができるようになり、効果も感じられるようになっていきます。これは、セッションの中での練習などを通して自分自身の記憶力が低下していることを実感するとともに、記憶を補うために外的補助具が必要であることを改めて理解したためと思われます。

外的補助具に関しては、メモやチェックリストの使用頻度は下がっていますが、これは第3回の感想にあったように、記入する道具をできる限り一本化することで間違いなく参照できるようにするためです。スマートフォンのアプリについては、セッション中にいくつかのアプリを体験してみたことで使いやすさや効果を整理することができました。

エ 学習カリキュラム終了後の様子

カリキュラム終了後もBさんに「復職に向けた事業主との打ち合わせ会議のための資料を月曜日までに作ってくる」などの宿題を何度か出しましたが、いずれもスケジュール帳やスケジュールアプリを活用して忘れずに行うことができました。

復職に向けた打ち合わせ会議で事業主に提出した自身の障害の特性をまとめた資料の中では、「記憶が継続しない症状があり、メモやふせんなどを活用して記憶を代償する方法が有効である」ことを伝えました。また事業主にお願いしたい配慮事項として、「メモを取りやすいようにゆっくり話してもらおうこと」、「可能な範囲で指示書やメール等の文字に残る形で指示を出してもらおうこと」をお願いしました。こうした対処方法や配慮事項はBさん自身で考えたものであり、Bさんの障害の自己理解や補完手段の習得が進んだことがうかがわれました。

プログラム終了後Bさんは復職しましたが、復職後は新型コロナウイルス感染症対策のために所属部署全体が在宅勤務中心に切り替えられ、原則業務指示は部署全体にメールで来ることとなったため、やるべきことを忘れることなく業務を遂行できているということでした。

オ 考察

Bさんはカリキュラムの開始時には、自身に記憶障害があり、メモなどの補完手段が必要なことを理解していました。また、第2回の感想で「なかなか覚えているということが難しいので、写真を撮ることを覚えていきたい」と述べているように、補完手段の活用が重要であるという認識を持っていました。

そのため、カリキュラムの中で練習や宿題を通して様々な補完手段を試すことに前向きであり、また、当初は抵抗感を持っていたスマートフォンの活用についても、実際に試してみて効果があると感じると積極的に取り入れることができていました。また、写真やスマートフォンの活用については、他の受講者が使っている場面を見てその効果を実感した経過があり、他の受講者との意見交換や観察学習ができる小集団形式のカリキュラムであったことが、Bさんの補完手段の習得に有効だったと考えられます。

<参考文献>

- 1) 中島恵子、坂本一世、水品朋子、本田哲三『記憶障害患者へのグループ訓練の試み』, 「認知リハビリテーション」(2001), pp. 58-65.
- 2) 高塚美貴、山崎文子『記憶障害者を対象としたグループ訓練の試み』, 「作業療法 22」(2003), pp. 243-252.

- 3) 川上昇八、中島恵子『高次脳機能障害者への認知リハビリテーション—注意と記憶障害のグループ訓練—』,「九州ルーテル学院大学発達心理臨床センター紀要第6号」(2007), pp. 65-73.
- 4) Withiel TD, Wong D, Ponsford JL, Cadilhac DA, et al “Comparing memory group training and computerized cognitive training for improving memory function following stroke: A phase II randomized controlled trial” *Journal of Rehabilitation Medicine* (2019), pp. 343-351.
- 5) 障害者職業総合センター職業センター『高次脳機能障害者のための「職業リハビリテーション導入プログラム」の試行実施状況について～3年間の取組を通して～』,「実践報告書 No. 28」(2015)
- 6) 障害者職業総合センター職業センター『高次脳機能障害者に対する支援プログラム～家族支援の視点から～』,「実践報告書 No. 21」(2008)
- 7) Kylie Radford, Miranda Say, Zoë Thayer and Laurie Miller “Making the Most of Your Memory” ASSBI Resources (2010)